

# आयुस्、あーゆす

(発行) 京都文教大学・京都文教短期大学図書館  
京都府宇治市植島町千足80

## ❀❀❀ しばらく借りたままの本 ❀❀❀

前京都文教大学・京都文教短期大学図書館長  
総合社会学部 教授(社会学、大衆文化論)

鶴 飼 正 樹

短大図書館から借りたままになっている、分厚く重い本がある。教員は図書の貸出期間が3カ月あるのだが、それを一度延長しても、まだ返却していないのだ。本の厚さは5センチを超え、重さも約1.4キロ。普段から持ち歩いて、通勤電車の中で広げて読むことなど、とてもできそうにない。

本のタイトルは『岩下清周伝』。大空社という出版社から、「伝記叢書シリーズ」の第335巻として、2000年9月に発行されている。

こう書けば、ああ、あのシリーズかと、思い当たる人もいるかもしれない。有名無名を問わず、近代日本を生きた人びとの伝記を復刻した、300冊を超える長大なシリーズである。

『岩下清周伝』は、このシリーズの中でとりわけて分厚い。およそ800ページ。岩下の生涯や業績について詳細に書かれているだけでなく、交流のあった多くの人が岩下の思い出を寄稿しており、その人となりもよくわかる。元の奥付によれば、1931年5月に、「故岩下清周君伝記編纂会」編で出版された非売品である。

ところで、岩下清周とは何者なのか？ 1857(安政4)年生まれ、1928(昭和3)年没。ということは、私のざっと100歳年上で、90年以上前に亡くなった人。手短かにいえば、明治から大正にかけて活躍した実業家、経営者、銀行家、政治家。現在の近畿日本鉄道や阪急電鉄の草創期に社長をつとめ、大阪ガス、東洋紡、森永製菓、豊田自動織機などにも、銀行家として積極的な投資・融資をおこなった。今日の関西財界の基礎を築いた功績者のひとりともいえる存在なのだが、みずからが頭取となっていた北浜銀行の倒産・整理にともなって、背任押領などの罪で起訴され、有罪の判決を受けた後は、財界から引退し、富士山麓で農園を営んで暮らした。

経営史が専門でもない私が、なぜこの岩下清周に関心を持ったのかというと、『あーゆす』前号に書いた「謎の少女歌劇団」の社長・島幹雄のインタビュー記事に、その名が出ていたからであ

る。『アサヒタイムス』という、いかにもあやしいな地方タブロイド紙のインタビュー記事だ。島は、北浜銀行から知人が借りた金を、銀行倒産後、富士山麓まで岩下清周を訪ねて返済した。その意気に打たれた岩下の紹介によって、少女歌劇団は台湾や朝鮮、満洲で公演するようになったというのである。

岩下清周は、先ほども書いたが、阪急電鉄の草創期の社長だった。ということは、宝塚少女歌劇団の創設者・小林一三の上司である。元上司の後押しがあることを知っていれば、小林一三にも「謎の少女歌劇団」に対する遠慮のようなものがあつたのではないか。全国を巡業したり、台湾や朝鮮、満洲で公演したりするさいに、「宝塚のニセモノ」として排除されなかったのは、岩下とのコネがあつたからではないか。

こう考えて、岩下について書かれた本はないかとOPACで検索してみると、『岩下清周伝』が短大の書庫にあることがわかり、借りだしたという次第である。

手に取れば、ずっしりとした重量感。おそらく私以前にこの本を借りた人はない。20年近く、だれも開いたことがなかったページを広げると、本の厚みに耐えかねて、バリッと音をたてて背が割れた。

小林一三はこの本に「岩下翁に対する私の誤解」という追憶を寄稿している。3ページほどのごく短い文章で、世間や他人を気にすることなく、みずからが正しいと考えることを貫いて生きて岩下に敬意を示している。少女歌劇については書かれていなかったが、岩下清周という人物を、もう少しじっくり味わってみたい。こう思って、『岩下清周伝』を手元に置いたまま、今日に至るというわけである。

ちなみに、岩下清周の長男・岩下壮一の伝記『岩下神父の生涯』もこのシリーズにおさめられている。哲学者であり、カトリック司祭であり、ハンセン病患者の福祉に尽力した人である。

(うかい まさき)

## \*\*\* 大学の図書館を、あなたはどのように使いますか？ \*\*\*

こども教育学部 学部長・教授（教育課程論、教育社会学） 南 本 長 穂

大学図書館をどのように捉えていますか？

こう聞かれて、大学には図書館が設置されていることにまったく疑問を抱かないなら、ほぼ合格です。でも、大学図書館をどのように利用しますか？と聞かれて、「講義と講義の間の時間つぶしの場所」とか、「待ち合わせ場所」では、大学図書館が可哀想です。

大学図書館は、大学創設時以来、何十年にも渡り、さまざまな工夫や苦勞を重ねて、学生にぜひ読んでもらいたい、見てもらいたいといった思いから、貴重な図書（本や資料）や映像資料等を収集し、展示・保管してきています。大学図書館はどの大学も同じ考えです。ただし、大学の規模に相応して、図書の冊数と種類には差があります。他の大学に行く機会があれば、ぜひ大学図書館を尋ね、違いを知るのもおもしろいです。

私的なことですが、私は大学入学までほとんど本らしい本を読んだ経験がなかったです。戦後の貧しい山村に生まれ、小学校の時に肺炎を拗らせ、無医村のために祖父母と一緒に徳島市内の小学校に転校し、病院に通い、生きていただけで十分でした。数学だけが中学校、高校と成績が良かった程度で、なりたい職業もなく、親の言うまま地元の教育学部に入学。何かに取り組んだという記憶もない、高校までの生活だったのですが。

今でも鮮明に覚えていることですが、大学入学前に、父親の友人が私の家に息子さんを伴って来られました。私が挨拶をした時に、息子さんから掛けられた一言が強く心に残りました。「県外の国立大学の大学生は本をたくさん読みますよ。」後で、父親から〇〇国立大学を卒業し、4月から東京の有名企業に就職すると聞かされました。進学塾などない時代、高校の復習程度の勉強しかせず、国語は最も成績が悪く、教科書以外は読んだこともない自分を認識し、生まれて初めて劣等感かなと思う暗い感情に囚われ、落ち込みました。

大学1年次の秋、たまたま友人と大学図書館に入り、履修中の「社会学」の講義内容に少し興味を持っていたことから、社会学の叢書の1冊を偶然に手に取り、開くと、天皇制とか日本人の戦

前と戦後の社会意識、という言葉が目に入りました。祖父母から戦前の生活について聞いていたり、父親が旧満州（中国東北地方）の長春で軍隊生活を送ったこともあり、何となく興味を持ち、大学図書館で初めて本を借りました。戦前と戦後の日本人の社会意識は変化したという前提を覆すような論述で、自分が表面的な理解にとどまっていたと感じました。何度も読み返し、貸し出し期限がくると、再び借りました。しかし、十分に意味が読み取れない箇所も多く、なんとと言っても専門用語を用いた論述への理解の困難さ、自分の読書能力のなさに自己嫌悪を感じました。この本との出会いから、専門的な本を読み理解することを大学生生活の課題に据えました。

2年次に教育学研究室に入り、教育学の基本的な教科書を毎日最低15頁読み、1冊の本を3回読み通すという課題を設定し実行しました。2年間、教育学の分野の本をこのペースでほぼ読み続けました。3年次の終わりに、教育社会学専攻の先生から学問的な教えを受けるようになり、徳島県で教員になる前に、教育社会学をもう少し勉強し、専門書をもっと読みたいという思いから、初めて県外で大学院生活をすることにしました。

大学院では、指導教授が作成した「研究室入門」と題する小冊子で「知的禁欲主義」という生き方を教えられ、それを自ら実践する教授のもとでの大学院生活は、自分の学問的能力のなさ、学問に取り組む態度の未熟さを痛感する4年間でした。

大学に就職した頃は、論文を書くことが第一の仕事でした。しかし、1つの論文を書き上げると、脳をリフレッシュさせるという言い訳を勝手に作り、若い頃は、富岡多恵子、太宰治、松本清張など、思いつくまま、読みやすい本を読みました。

大学生にとって、講義や演習等の大学の公式的な学習の場での学びは大切ですが、大学はそれだけで勝負しているわけではありません。大学図書館は、学生の自発的な学習の機会と場を提供しています。利用次第で、大学生の将来の生き方やそれを支える知識や知恵を形成する場や機会にきつとなります。 (みなみもと おさお)

## ☆☆☆ こども教育学部開設に想う ☆☆☆

元京都文教短期大学図書館長

元幼児教育学科 教授(声楽、音楽教育)

伏見 強

あーゆす第42号は「こども教育学部開設記念号」として発刊される運びとなり、この記念号に寄稿できることを誠に光栄に存じます。新学部の今後の発展に期待し、一筆啓上致します。

こども教育学部が新設された2020年は京都文教短期大学(以下本学)の開学60周年の記念すべき年に当たりますが、残念ながら、私はこの年の3月に本学を退職しました。私が勤務した同一キャンパスに本学幼児教育学科(以下幼児教育学科)と同様の教育目的と教育内容を有する「こども教育学部」が誕生したことは同慶の至りです。私が奉職した幼児教育学科と大学の新学部が協働しながら、学生の皆さんの切磋琢磨を後押しし、活発なFDやSD等とおして両方の学部と学科が共に益々発展することを祈念する次第です。

本学50周年を契機として必修科目「自校史を学ぶ」が創設されました。その際に編纂されたテキストに本学園の歩みが詳述されていますが、この科目を3回ばかり担当した<sup>よしみ</sup>誼で幼児教育学科の変遷の概要をピックアップさせていただくと、幼児教育学科は1966年幼児教育科としてスタートし、1971年には幼児教育学科が改組され、小学校教諭及び幼稚園教諭の養成を目的とする児童教育学科(初等教育専攻)を増設し、児童教育学科(幼児教育専攻)の2専攻に専攻分離されました。その後、京都文教大学の併設や学内外の諸情勢の変化に対応しながら、定員の変更やコース制、クラス制なども採り入れて発展してきました。2007年には幼児教育専攻と初等教育専攻が統合され、専攻制から、幼児教育コースと子ども未来コースの2コース制に移行し、2009年には現在の幼児教育学科に1本化されました。

私は2006年に本学に着任しましたので、児童教育学科2専攻体制の最後と1本化された幼児教育学科のスタートの時期だったということになります。

他方、全国の高等教育機関では多様化する学生

への対応や授業の充実、教育の質保証などが叫ばれ、学生による授業アンケートやFDなども一般的になり、大学改革諸課題が具体化かつ可視化され、2005年には評価機関による第三者評価が始まりました。この第三者評価が実施されるかなり以前から全国的なセミナーやフォーラム、シンポジウム等が開催され、全国の大学・短期大学の先進的な取り組みが盛んに紹介され広報・周知が図られ、これらの研修会には私も前任校教員として参加していました。

本学は2006年度に短期大学基準協会より適格と認証評価された訳ですが、私の着任直後のことであり、当然のことながらその大変な準備作業などに関わることは<sup>ほとんど</sup>ありませんでした。7年後の2巡目については担当者の一人として緊張しながら随分と汗をかいたことが懐かしく思い出されます。2019年に幼児教育学科の教育課程は再課程認定により一新され、2020年はその完成年度であり、3巡目の認証評価受審年を迎えます。大学の方は前年度に適格の評価を頂いておられますので頼もしい限りです。

この度、認証評価の7年サイクルでカウントしてその2倍の14年間という長きに亘って本学に勤務し、前任校を含め通算43年間の短期大学教員生活にピリオドを打つことになりました。このあーゆすが発行される頃は本学非常勤講師ですが、もう1年、教職に従事できることの喜びを噛み締めているところです。

また、同一時期に大学図書館と短期大学図書館、大学院図書館が発展的に統合される運びとなり、平成29～30年度の短期大学図書館長を務めた私は短期大学単独の最後の図書館長ということになりました。今回の図書館の統合によって、新学部と既設の大学院、各学部、短期大学の教育・研究の基盤がいっそう強化され、すべての学生の主体的な学修と教育の質保証に繋がることを願って止みません。(ふしみ つよし)

## ▼▼▼ 私のすすめる3冊(こども教育学科編) ▼▼▼

### 「ルポ虐待 ー大阪二児置き去り死事件」

杉山春 著／筑摩書房 2013

本書は、2010年に大阪市西区のマンションに3歳と1歳9ヵ月の子どもを置き去りにして餓死させた虐待事件のルポルタージュである。この悲惨な虐待事件に至るまでに、どのような時間経過や出来事があったのか、それは特殊なことなのか…。著者の杉山氏は、事件後に裁判傍聴や関係者への丹念な取材を通して、後に殺人犯に問われる母親をめぐる人間関係のコンテクストを、非審判的態度で書き綴る。悲惨な虐待に至るまでの様々な流れを読み進め、再構成するように受け止め直しながら、是非いろんなことに心をめぐらせてほしい一作である。「虐待」を形作る本態や、「ヒト」を営む上での様々なことなどを本書は考えさせる。

教授 柴田長生(しばた ちょうせい)

### 「学校づくりの記」

斎藤喜博 著／国土社 1990

是非知っておいてほしい、と思える教育者がいます。例えば、森信三であり、斎藤喜博です。森信三なら、「修身教授録」が有名です。他にも「理想の小学教師像」という書物もあります。斎藤喜博なら、「授業」、「授業入門」、「授業の展開」などがあります。

さて、今回紹介する本は、「学校づくりの記」です。以前はすぐに手に入ったのですが、今は絶版扱いになっているようです。島小学校の校長として赴任した斎藤喜博が、どんな学校づくりをしていったのか。そのことが詳細に語られる書です。保護者や地域、教職員を巻き込んで、学校の改革を進めていく校長。もちろん改革ですから、順風満帆とはいかないことも出てきます。交流を重ね、やがて学校はよりよいものに変わっていきます。学校づくりの何と面白いことか。何度読んでもそう思います。

准教授 大前暁政(おおまえ あきまさ)

### 「多分そいつ、今ごろパフェとか食ってるよ。」

Jamマンガ・文；名越康文監修／サンクチュアリ出版 2018

私は、嫌なことが続くとお気に入りの本屋をぐるっと一周、歩くことでリフレッシュしています。ある日、目に飛び込んできたタイトルがこの本でした。印象的な猫の4コマ漫画に「これ私の事」とひとりで突っ込みを入れレジに向かったことを覚えています。著者は、フリーのイラストレーターです。日常の生きづらさを得意な漫画を使ってSNSで発信した「嫌な気持ちを引きずらない考え方のコツ」です。新しい季節、いろいろな変化の中で経験する「嫌な気持ち」を社会的な背景や心理学的な視点と合わせて考えてみましょう。「あるある」と感じた時が次の学びへの気づきとなると思います。

また、出版社は「もう一度、本っていいよねと思っ出してもらいたい」と本づくりをしている会社です。一冊を丁寧に作り、人と人をつなぎ世に送り出された本の歴史に思いを馳せることは自分の視野を広げてくれるきっかけにもなることでしょう。

准教授 岡本浄実(おかもと きよみ)